

江戸時代前期の「ナラノヤエザクラ」の記録

川 端 一 弘

先人のナラノヤエザクラ論考

ナラノヤエザクラについては、文学、歴史的な立場から論述が多数なされている。国文学者の山田孝雄(1920, 1921)や名越那珂次郎(1937)等の詳細な論考である。最近においても小川和佑氏の一連の著書がある。しかし、いずれも品種的な記載が見られるようになる江戸時代のナラノヤエザクラには考証が及んでいない。

山田(1925)は「道円性桜を好み、桜譜をあらはす。(中略)道円の桜譜は桜の専書の魁をなすに止まらず、桜の品種の記載(注:15種)として甚だ貴重すべきものなり」と那波道円(活所)を語り、桜の品種について記載している。さらに松岡玄達(恕庵)の『桜品』について「桜品はその当時京都その他に存在せる桜の種類六十九をあげ、これを図にてあらはし説明を加へたるものにして桜史中重要な著作なりとす」と『桜品』の重要性を記し「今その増加したるもの(注:桜譜に比し)のうち著しきものをあぐれば次の如し」と33種を記載している。しかし、増加したるものにある「奈良桜」つまりナラノヤエザクラについては、著しきものなかに挙げず、関心を示していない。桜について多くの文献を駆使し論をなした山田であるが(後年に『櫻史』として一書にまとめられている)、江戸時代のこの桜については何故か関心を寄せていない。

国文学者である名越は文献からの引用を豊富に紹介したが、江戸のこの桜については『猿蓑』から

いか(伊賀)の花垣の庄はそのかみ奈良の八重桜の料に付られけると云伝えんへれば

一里はみな花もりの子孫かや
と芭蕉の句を紹介するのみである。

他に芭蕉の句とされる「奈良七重七堂伽藍八重桜」がある。句中の八重桜は、当時、奈良の地で八重桜といえは「ナラノヤエザクラ」を指す(後述)。この句の成立事情については、太安隆(1994)の詳細な紹介がある。

江戸時代のこの桜について論考を残したのは三好学である。簡略であるが考証があり、江戸時代のナラノヤエザクラについては三好の論考を嚆矢とする。そこで三好の論考を検証しつつ、江戸時代のナラノヤエザ

クラについて検証してみたい。

三好は「銘桜の保存に就て」(1923)のなかで、

“今日の奈良八重桜が品種的に記載されたのは徳川時代からで、延宝9年に出版した水野元勝著『花壇綱目』に簡単なる記載がある。次で宝暦八年に出版した松岡玄達の『桜品』には奈良桜として図を掲げ、「八重桜也、花小輪にして甚やさしく、色赤し、茎長く細し、伊勢大輔が歌に依りて好事のもの名とす」と記してある。此記載は今日の奈良八重桜に全く合って居り、又同書の奈良桜の図とも一致して居る”と語っている。

他にナラノヤエザクラについて論考したものは、『天然記念物調査報告』「知足院の奈良八重桜」(1924)(以下『調査報告』と略称する)、『天然記念物解説』「知足院の奈良八重桜」(1926)がある。江戸時代のこの桜について『調査報告』では“奈良八重桜が「奈良」「奈良桜」「奈良郡八重桜」等の名により桜の名種又は名所の桜として記載せられたるは徳川幕府の初期の頃

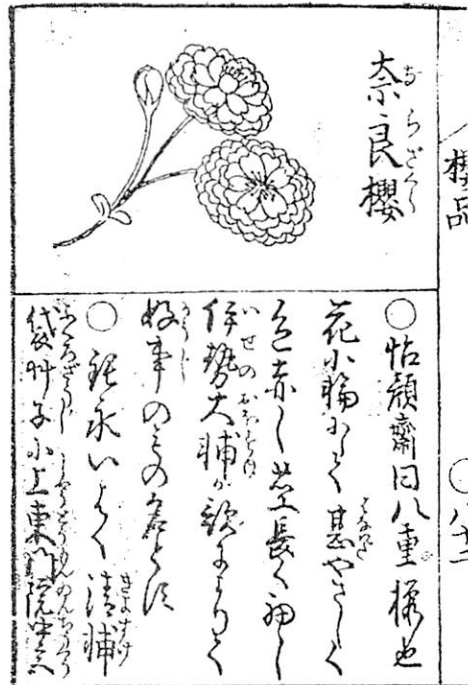


図1 松岡恕庵『桜品』より

より始められ”と説明し、ナラノヤエザクラを記載している江戸時代の書物を列記して、さらに『桜品』の文章を引用している。名所案内記は『大和名所図会』を紹介している。『天然記念物解説』では“然るに徳川幕府の初期の頃から奈良八重桜・奈良都八重桜・奈良都（桜の誤植）・奈良等の名によって特殊の桜が記載されて来た”とあり、江戸時代の文献を列記している。さらに「大和名所図会」（寛政三年版）を紹介し、畔田伴存の説明の後に『桜品』の品種的な説明を引用している。

『調査報告』と『天然記念物解説』の両書には、基本的な違いはなく、内容はおなじである。

三好は江戸時代のナラノヤエザクラを論じるにあたり『桜品』の記事を幾度も引用している。しかし『桜品』には三好が引用した品種的な記事の次頁に『袋草紙』『沙石集』の内容が記載されている。三好は全くこの部分に関心を寄せておらず、両書については触れていない。植物学者らしくナラノヤエザクラについて品種的な記載がなされている一節に関心を寄せているのである。

著者の松岡恕庵（玄達）について、三好（1923、発表1926）は評論をなしており、その緒言において、初步的な知識であるが品種を探索しこれを解説した学者があったればこそ、後世の品種攻究の端緒が開かれたことを論じて、松岡恕庵が学界の先駆、功労者であることを述べて高く評価している。

山田や三好に桜の書として、その重要性を高く評価された『桜品』であるが、その成立は18世紀である。

三好は「徳川幕府の初期」の頃より多くの名称で記載されていると語っている。しかし、三好が列挙した書物では、江戸の前期（1600年代とした）の書は『花壇綱目』延宝9年（1681）のみ見られ、ナラノヤエザクラを記載した資料が存在していない。「徳川幕府の初期云々」の記事は三好の誤解である。

他に、この時期にナラノヤエザクラの記載がみられるのは、『花壇地錦抄』元禄8年（1695）、奈良の名所案内記である『南都名所集』延宝3年（1675）、『奈良名所八重桜』延宝6年（1678）、『大和名所記』延宝9年（1681）、簡単な記載がある『奈良曝』貞享4年（1687）である。

名所案内記のナラノヤエザクラについては後述するが、『花壇綱目』に見られるこの桜についての記述には、三好が指摘したように簡潔ではあるが初めての品種的な記載がある。

それは「奈良桜 八重壺重中輪」という記載である。（注：鎌倉時代の『七大寺巡礼私記』には、ナラノヤ

エザクラが遅咲きの桜であることの指摘がある。この桜が品種的には現在までも継続されていることを証明する重要な手がかりであるが、作者は品種的な意識で記載したものでない。）

『花壇綱目』の作者水野元勝については資料がなく委細不明である。著名の綱目は李時珍の大著『本草綱目』を意識したものであろうが、似て非なるものである。刊行は大阪でなされている。水野は序文において、隠者の三友として「書、茶、花」を掲げ、花の楽しみをうたいあげて、自分に同じ興味をもつもののために、この書をなしたことを記している。内容は四季の花の簡単な特徴と栽培法を記したものである。

下巻には「珍花異名の事」として牡丹、芍薬、梅など8種の花の珍花異名を紹介している。ナラノヤエザクラは「桜珍花異名の事」40種のなかに記されている。それぞれの桜には簡単な特徴が記されている。これを三好が品種的記載としたのであるが、その表現は「小輪なり」「中輪なり」「小輪中輪あり」などとあり、簡潔かつ同じ表現が繰り返され、それぞれの桜の品種の区別が判然としない。「奈良桜」の下段には「よし野

中輪八重一重」とある。「奈良桜」と「よし野」との区別は判然としない。当時の園芸家仲間うちでは理解できたのであろうか。水野元勝の記載は、松岡玄達が『桜品』で博物学的な観察をなしたのとは異なり、博物学的なものでない。

桜の名には、後世にも伝えられているものが多いが、「八重一重 中輪大輪あり」などのように、理解に苦しむような名のもので含まれている。

『花壇地錦抄』については、著者の伊藤伊兵衛三之丞の履歴研究とともに多くの研究がある。伊藤伊兵衛三之丞は江戸染井村の植木屋である。『花壇綱目』に比し、花の記載数が一段と増加し、特徴の記載が詳細になされている。三巻、「夏木の分、辛夷のるい」には「大山蓮華 玉蘭花に同じ」と注目すべき記載がある。江戸時代園芸の多様化には驚かされる。

ナラノヤエザクラは二巻、「桜のるい 木春中末」に、名のみ記すものを含めて46種のなかにある。「なら桜 いにしへのならの八重ざくらか」とあり、名の由来を記しているのみである。花の特徴が記載されていないことから、ナラノヤエザクラの名前は知られているが、実物がまだ江戸に伝わっていないようである。

三好の他には、江戸時代のこの桜に触れている大西源一（1930）と足立康（1932）がいる。

大西は余野（上野市予野）のナラノヤエザクラに関して、文学博士の沼田頼輔の『植桜美談』（1930）の誤りを指摘したものである。江戸時代前期の『伊水溫

故』貞享四年(1687)が偽書であることを指摘し、沼田の資料に対する不備を語っている。大西のこの論は、上野市予野のナラノヤエザクラを語るときには必読の論である。

足立は東大文学部美術史料を終えた後、工学部建築科大学院を卒業し、日本建築史に足跡を残した。足立の検証は「興福寺東円堂に関する誤謬」に付け加えられたもので、表題からナラノヤエザクラの検証に関しては、一般に知られることが少なかった。

『沙石集』に記載された東円堂前のこの桜に関して、多くの資料により検証がなされている。資料のなかには、今まで全く触れられていなかった資料があり、美術史を学んだ史家としての足立の面目躍如としたものがある。

江戸時代の論考に関しては後述するために、ここでは、足立が大西の論を紹介し、再度、予野のナラノヤエザクラの記事がある『伊水温故』が偽書であると指摘しているを紹介するとどめたい。なお、この一文は「足立康著作集『古代建築の研究 下』(1987)に再録されている。

名所案内記のナラノヤエザクラ

次に、三好が触れなかった(三好は「名所図会解説」(1932)の一書をなしており、たくさん名所図会を解説している。しかし、以下の書については記載がない)江戸前期の名所案内記に記載されたナラノヤエザクラについて触れてみたい。『南都名所集』『奈良名所八重桜』『大和名所記』『奈良曝』の四書である。『奈良曝』を除く、各々「八重桜」の章に記載が見られ、奈良の地で八重桜といえばナラノヤエザクラを指していたことが理解できる。

延宝3年(1675)に刊行された『南都名所集』は、序文によると、太田叙親があらましを書いたものを、村井道弘が完成させたものらしい。内容は大和一門に記載が及んでいる名所地誌であり、章の終わりに古歌や村井の作句が添えられている。著者の村井は奈良の住人である。

ナラノヤエザクラについては「観禪院 付東円堂 八重桜」の章に「まえに東円堂の旧跡あり、かの名木の八重桜いまにあり」とあり、さらに『詞花集』、『沙石集』、『新古今集』よりナラノヤエザクラ記載の部分を紹介している。

村井は、ナラノヤエザクラが、東円堂の旧跡に、いま、つまり現在あることを記している。

注目すべきことは、この名所案内記にはさらに興福寺に八重桜の記載があることである。「中院屋 付

乗院 松室跡」の章に「みよはなの最中院のやえざくら」と洒落て記載してある。「中院のやえざくら」と呼んでいたらしい。中院の八重桜の品種もナラノヤエザクラであろうが、注目すべき記載である。

『奈良名所八重桜』は、江戸の小伝馬町柏屋仁右衛門により延宝6年(1678)に刊行されている。巻末に「江戸之住 大久保急鑑秀興 南都之住 本林伊祐 両作」とあり、序文には、江戸の大久保秀興が奈良の知人本林伊祐の助けをえて書を成したらしいことを記している。大久保については他に資料がなく委細不明である。

ナラノヤエザクラは「観禪院 東円堂の跡 八重桜」の章に、「また、この前に八へざくらとて、天下無双の名樹有り。世の人、東円寺桜といえるは、いかが」と最初に記載している。

大久保は、奈良の人はこの桜を東円寺桜と呼んでいるが、如何なものかと云うのである。図版には「ならの八重ざくら」と記入されており、この桜は、かの著名な「ならの八重ざくら」であると大久保は主張している。

数年後の刊行であるが、『奈良曝』には「観禪院(中略)此所に名木八重桜有。東円寺さくらともいふ」とあり、当時、奈良の人は東円堂の前にある桜を「東円寺桜」と呼んでいた。これを大久保は、奈良の人が伊勢大輔の故事を忘れてしまったかのように指摘した。しかし、『奈良曝』や前述した奈良の住人村井は正確にこの桜の来歴を述べている。さらに村井は別章で「中院のやえざくら」を書いている。つまり奈良の人は、この中院の桜に対比して東円堂の跡の桜を「東円寺桜」と呼んでいるのである。

大久保が奈良の人達を誤解していることが判明したが「ならの八重ざくら」と指摘したことは重要である。名所案内記においてナラノヤエザクラの名称を明確に記載しているのはこの部分だけである。

次に「この桜と申すは、聖武帝春にだになりぬれば、殊更さくらを愛し、尋ねもと行ひけるが、御心の色にそむ花なりき、あるとき三笠山の奥へ御幸ならせたまひしに、(中略)谷底にこのさくら有り、(後略)」と記す。

この記事は、江戸時代のこの書に突然出現したものである。正史である「続日本紀」に記載が無く、『万葉集』、『懐風藻』その他の史料にも記載がない。全く根拠のない大久保の作り話で、史実ではない。

さらに大久保は「そののち、仁皇四十六代孝謙天皇 宇宇二年の頃より、この御堂の前にうえられける」と記す。この御堂、即ち東円堂のことであるが、12世紀

の創建であり、孝謙帝時代にはまだ存在しない。御堂を観禪院であると仮定しても、少し時代が遡るが、観禪院は10世紀の創建であり事実と符合しない。つまり、この孝謙天皇の記事も大久保の作り話である。

つぎに大久保は『詞花集』の伊勢人輔の故事と『沙石集』のナラノヤエザクラの説話をつなぎ合わせ一つの説話にして書いている。随分乱暴な話である。

以上、この書のナラノヤエザクラが記載されている部分から取り上げてみた。すでに和田萬吉(1916)は「此書寺院の條下に仏像の靈驗、高僧の奇蹟を説くこと頻繁にして、往々荒唐無稽に陥り、かの愚夫愚婦の迷信を助長する縁起集を読み行くが如き感あり、名所記中最も佞仏の臭味多きものとす。文調整はざるにあらねど間々筆耕者に誤られて達意を欠く処あり」と書評している。『奈良名所八重桜』という書の性格を理解していただけるだろう。

三年後の延宝9年(1681)に刊行された『大和名所記』は大和郡山の林宗甫により著された。

林宗甫について和田は「奈良の饅頭屋の主人若しくは類族にて、宗二の後に当れる人なるべし」としたが、すでに『大和人物志』(1909)において「山本某(平左衛門政興のこ)日並記」元禄5年6月15日条「到郡山 蠟燭屋甚兵衛宗甫当国後学之秀才」の資料を示し、甚兵衛宗甫がその人であることを記している。当時その才能の優秀なことが認められた人である。蠟燭を商う傍ら学問に親しみ、俳諧にもその才を發揮した人のようである。後年さらに林宗甫の研究は深まり、植谷元(1966)は詳細な報告をなしている。「山本平左衛門政興日並記」天和2年9月15日条「郡山蠟燭屋林宗甫撰処之、大和名所記板行入銀之書物出来、昨日到来也」の資料を紹介し、天和2年(1682)刊行の事情を記載して、天和2年刊行説を展開している。俳人としての紹介も精密になされている。

この書にもナラノヤエザクラについて記載がある。「八重桜」の章「観禪院のうしろ集会堂の前に東門堂の跡をそのほとりに八重桜なごりばかりにのこりてあり。

八重桜は東門堂のまへにあり『沙石集』。又金堂にさかへたり『盛衰記』などと書れたり。八重桜といふは一木にはかざらざりけるにこそ。(後略)」である。

林宗甫は、学者ではないが大和の倭学の秀才と称されるだけあって、実見した事実と古典籍の名を挙げて内容を紹介している。池田末則(1990)が「『大和名所記』は徳川中期(注：前期の誤りであろう)、大和国全域の名所・旧跡を考証、各郡単位に網羅した最初の刊本で、画期的な地誌である。本書はいわゆる観光案内的なものではなく、大和郡山の学者林宗甫の好著

である」とその解説で絶賛する所以である。和田は「凡て古史旧記を引きて社寺の來歴を叙し、古歌を挙げて名所故蹟の追憶に資したり。(中略)歴史並に文学研究の旅行家等に取りて参考の好書たるを失はず」と同様の評価を下している。

ナラノヤエザクラは「なごりばかりにのこりてあり」と実見を記している。さらに、一木には限らないと指摘している。書誌学が進歩した現在では『盛衰記』(源平盛衰記)の金堂は東門堂の間違いでであるとされるが、倭学の秀才とされた人らしい観察である。

さきに紹介した足立は、ナラノヤエザクラが複数存在していたであろうことを検証している。その根拠となる益軒(貝原益軒)の一文は「いにしへ、八重桜の有り処は、観禪院の後、集会堂の前に、東門堂の跡有。其辺なりと云。但し一所にかぎるべからず。興福寺内に八重桜甚多し」である。足立は資料名を示していないが『和州巡覽記』元禄9年(1692)である。

貝原益軒は、福岡藩士の子として生まれ、『養生訓』『女大学』をはじめ多くの著をなした。本草学にも貢献して『大和本草』の大著がある。生涯に幾度となく江戸、京都を往還し、また江戸京都を基点として諸国を巡歴し、紀行文も多く記載している。

大和には明暦元年(1655)26才のときを最初に、数度訪問をし、元禄5年の訪問を中心に『和州巡覽記』をなしている。上記の名所案内記と同じ時代の記録である。書名からは紀行文を窺わせるが、内容はむしろ名所案内記に近いものである。

益軒は東門堂跡以外にも興福寺の境内には八重桜が多いと記録している。当時、「中院のやえさくら」はじめ、東門堂跡以外にもナラノヤエザクラが存在していたことが窺える。『和州巡覽記』は続いて「其本は皆竹の簾につつめり。鹿の角にて桜をすれば枯るの故也」と記している。当時も現在と同じく鹿害に悩まされていた様子が分かる。

以上、江戸時代前期にナラノヤエザクラを記した名所案内記を個々に検証した。さらにこの四書と『大和名所図会』からは、ナラノヤエザクラについてもう一つの興味ある事実が判明するので紹介したい。

『南都名所集』には「かの名木の八重桜いまにあり」とある。3年後の『奈良名所八重桜』の序文には「さてこの八重さくらも、木たち物ふりて、門わきの姥さくらとなれど、花のひこばえあまた生ひしげり、いにしへの名のみしてむかしに易らぬ春は忘れず、しばめる華の色なうて匂ひいと淋しげに咲き残りぬ」とあり、大久保が見学した頃では、ナラノヤエザクラは老木で氣息奄々の状態であったことが分かる。さらに3年後

『奈良名所記』では「そのほとりに八重桜なごりばかりにのこりてあり」とあり、林は枯死寸前といった風情を記している。

『大和名所図会』(1791)では「延宝の頃までこの所に八重桜ありけるが、今山桜一株あり、これも古木にはあらずとなん」とあり、八重桜はすでに枯死して変わって山桜が植えられている様を記載している。

江戸時代前期のナラノヤエザクラの記録から、当時のこの桜の状況について理解いただけたと思う。

明治には東門堂の跡(奈良師範学校敷地となり、現在は奈良県庁東の駐車場となっている)にナラノヤエザクラが存在している。東門堂跡のナラノヤエザクラは幾度か途切れつつ、故事に因んで植栽されて受け継がれている。伊勢大輔の故事や『沙石集』に因んで古蹟の桜として受け継がれてきたのである。

参考文献

- 足立 康(1932). 興福寺東門堂に関する誤謬. 『史蹟名勝天然紀念物』7.
- 池田末則(1977). 『大和名所記』豊住書店版解説.(豊住書店)
- 池田末則(1990). 『大和名所記』臨川書店版解説.(臨川書店)
- 三好 学(1922). 日本の桜の研究Ⅱ ナラノヤエザクラ. 『植物学雑誌』36:10.
- 三好 学(1922). 桜品と桜図『史蹟名勝天然紀念物』5巻4号.
- 三好 学(1923). 銘桜の保存に就て. 『桜』(桜の会)6:1-7.
- 三好 学(1924). 知足院の奈良八重桜. 『天然紀念物調査報告』35.(内務省)
- 三好 学(1926). 松岡惣庵と品種の研究. 『東洋学芸雑誌』514.
- 三好 学(1926). 地足院の奈良八重桜. 『天然紀念物解説』(富山房)
- 三好 学(1932). 名所図会解説. 『岩波講座地理学』(岩波書店)
- 名越那珂次郎(1937). 奈良八重桜考. 『史蹟名勝天然紀念物』12:300-304.
- 大西源一(1930). 伊賀花垣の八重桜について. 『史蹟名勝天然紀念物』5.
- 大安 隆(1994). 『芭蕉大和路』(和泉書院)
- 植谷 元(1966). 岡村正辰と林宗甫. 『大和郡山市史』(大和郡山市役所)
- 和田萬吉(1916). 『古版地誌解題』(和田維四郎)
- 和田萬吉(1933). 『改訂重刊 古版地誌解題』(大岡山書店)
- 山田孝雄(1920). 桜品中古の巻. 『桜』3.(桜の会)
- 山田孝雄(1921). 櫻史近古の巻. 『桜』4.(桜の会)
- 山田孝雄(1925). 櫻史近世の巻. 『桜』7.(桜の会)
- 山田孝雄(1941). 『櫻史』講談社学術文庫版 1990.(講談社)
- 『和州巡覧記』元禄九年. 益軒全集 1911.(益軒全集刊行部)
- 『大和人物志』(1909).(奈良県)
- 『南部名所集』近世文学資料類従・古板地誌編版 1981.(勉誠社)
- 『南部名所集』日本名所風俗図会版 1984.(角川書店)
- 『奈良名所八重桜』近世文学資料類従・古板地誌編版 1975.(勉誠社)
- 『奈良名所八重桜』日本名所風俗図会版 1984.(角川書店)
- 『大和名所記』豊住書店版 1977.
- 『大和名所記』臨川書店版 1990.
- 『大和名所図会』大日本名所図会第一輯版 1919.(大日本名所図会刊行会)
- 『花壇綱目』享保元版
- 『花壇地錦抄』東洋文庫版 1976.(平凡社)
- 『花壇地錦抄』農山漁村文化協会版 1995.
- 『奈良曝』奈良市史編集審議会会報版 1963.(奈良市史編集審議会)
- (〒631-0045 奈良市千代ヶ丘3-1-60)